GUNHUNTERGIRL

sola

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＵＮＨＵＮＴＥＲＧＩＲＬ

【Ｎコード】
Ｎ３１４１Ｚ

【作者名】
ｓｏｌａ

【あらすじ】
ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界に転生トリップした少女チェリッシュがハンターになって原作イベントを極力回避しながら必死に生きる物語です。
主人公は少しトラブルメーカーですのでたまにいろんな騒動に巻き込まれます。

プロローグ

私は死んだ・・・

私は前世では何の特徴もない普通の女子高生だった。

ちなみに死因は車にはねられそうになった子供をかばっての事故死です。

確かにバトルマンガのようなファンタジーな冒険をしてみたいなーとは思ったことはあるけど。

なんで

なんで

危険度満載なＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界に転生トリップしてんだろ・・・

まあとりあえず死ぬ気で修行して念を身につけますか。

あ、言い忘れましたけどこの世界での私の名前はチェリッシュ＝バートンです。

若輩者ですがよろしくお願いします。

1話　水見式（前書き）

チェリッシュは原作のゴンやキルア並の天賦の才を持っています。

1話　水見式

ここはパドキアのはずれのとある田舎の港町
その街のはずれの森に４歳くらいの一人の少女がいた。
彼女の名はチェリッシュ＝バートン
４年前に神のいたずらかこのＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界に転生トリップした者である。

「ふー、ようやく纏・練・絶と四大行がまともにできるようになったわ。
ここまでできるのに４年と長かったよ」
少女はここまでの苦労をしみじみと独り言で語っていた。
まあ、赤ん坊の頃から両親に気づかれないようにしながら瞑想をして精孔を開き、纏・練・絶・凝等と念の修行をしたのだから当然なのだが。（しかも、まだ体が幼いので念の上達に体がついていっていないためでもある）
「さーて、水見式をやってみますかー。」
チェリッシュが両手を向け水と一枚の葉があるガラスのコップに向

かって発をすると

「どういうこと・・・？
水の中に不純物ができて水の色が変化してる・・・」

コップの水の水中には粒のようなものができて、水の色が赤くなっていった。

「これって、私は得意系統は具現化系と放出系と2つもあるってことかなー。
ま、転生者補正ってところかしら
悪いことじゃないしそういうことにしておこっと」

というほうに1人納得した。

「あ、もうこんな時間だ。早く帰らないと父さんに怒られるわ。」

そして、彼女は目にもとまらないスピードで港街へと向かった。

2話　ガン・ショー（前書き）

たくさんの感想待っています。

2話　ガン・ショー

私の両親は芸人である。

なんでも昔、父ゲイル＝バートンと母二―ナ＝バートンは警察だったらしく銃の腕はかなりのもので優秀だったらしい。

らしいというのは、なんでも警察がマフィアと手を組んだりして、詳しいことは知らないが、二人共世界の黒い部分を知って上司や上層部のやり方に付き合い切れなかったので辞めたそうだ。

今は射撃の特技を生かして凄い早撃ちの曲芸撃ちを駆使したガン・ショーをして生活している。

そして、今私は父から玩具の銃ではあるが、銃の扱い方を学んでいる。

「うーむ、チェリッシュは上達が早いなー。
さすが俺の娘だ。」

「父さんがやったことを真似しただけよ。」

（おいおい一朝一夕でここまでできるものじゃないだろ・・・）

父は百発百中で的に当てまくっている私を見て呆れていた。

そんな父が呆れていることを知らないチェリッシュは今後のことを

考えていた。

（ふう、今は原作が始まる１０年前で私がハンター試験を受けられる年齢まであと６年
原作メンバー特にヒソカに遭遇したくないから早くとも原作の４年前の２８３期遅くとも2年前の２８５期にするべきだわ。この世界は死亡フラグ満載だから慎重に行動してある程度危険をなんとか自衛できるよう強くなるために頑張って修行しないと）

と必死にまじめに銃の特訓をしていた。

そして、夜
「ふー、ようやく練の持続時間は３０分かー、
疲れた・・・
ゴン達はこんなきっついことしてたんだなー、凄いよ」

というふうに遊び時間とかの暇さえあれば念の修行をして
それ以外は家の手伝いや銃の修行をする修行一色ハードな生活を送っていた。

3話　念銃　前編

銃の訓練を始めて1年たち、チェリッシュは5歳になっていた。

「ふー、当然といえば当然だけど、実弾が入った銃はまだ持たせてくれない。」

実はさっき父に実弾が入った銃を扱わせてほしいと頼んだのだが、父が

「少なくともまだお前には１０年早い」

と笑いながら言われた。

それで今、ゴム弾やＢＢ弾の銃を使って訓練している。

（それでも子供には危険で持たせるのは早いと思うけど・・・）

と考えながら、銃の訓練を始めようとしたら、黒色と銀色が混ざった色のものすごく気になる銃が目に入った。

「ねえ、父さん・・・、この銃は？」

「ああ、それはずいぶん古いモデルガンさ。気に入ったのならにお前にあげよう。」

その銃を凝で見てみると

（いや、その銃はモデルガンなんかじゃないすごい銃だと思うけど、だって神字らしきものが刻んであるし、オーラがバンバン出てるから・・・）

訓練が終わり彼女はいつもの街のはずれの森に来ていた。
当然、例の銃は持って来ている。

「さーて、早速試してみますか。」

と言って両手で銃を持ってみると
「すごい、自動的に周が発動してる。
しかも、自分の手足のような感じがする。
とりあえず、一発撃ってみよ」

そう言いつつ、念の応用技の硬を込めながら銃を目の前の２ｍ位の
岩に向けて

ドンッ

と念弾を撃つと

バゴーン

岩が粉々になりました・・・

「・・・・・・・あまりこの銃は使わない方がいいかも
強力すぎるし・・・」

と彼女は半分呆然としていると

ガサガサッ！

「ん、なんだろ・・・」

そして、出てきたのは

「う、嘘、なんでキツネグマが・・・」

よだれを垂らした危険な肉食動物だった。

4話　念銃　後編

「グガアアアアアアアアアアアア」

キツネグマは即座に口を大きく開け涎を滴らせながら襲いかかってきた。

チェリッシュはなんとかそれをかわし体勢を整えたが

（ど、どうしよー、どうしようー）

というふうにまだパニクっていた。

そんな隙をキツネグマは当然ながら見逃すわけもなく追撃してきた。

そして、チェリッシュは

（キ、キャアアアアアアアア）

と大慌てしながら無意識に反射的に銃をキツネグマに向けて

ズッドオオオオオオオオオオオオオオオン

とてつもなくでかい銃声と破壊音が周辺に響き渡った。

家に無事に帰宅した彼女だったが、
（つ、疲れた・・・
うう、あのドでかい銃声は街にまで届いたもんだから騒ぎになって、
警察や両親にばれないようにするのは大変だった・・・。）

心身疲れ切っていた。

ちなみにキツネグマはチェリッシュが放ったあの念弾で跡形もなく
消し飛んだらしい。

4話　念銃　後編（後書き）

念銃　波皇
神字が刻まれたオーラを込めることで念弾を撃つことができる念能力者専用の銃
念を知らない人にとってはただの使えない銃なためにいつのまにかモデルガン扱いになってしまったらしい。

能力
念能力者が持つと自動的に周が発動する。（使用者のオーラは消費しない）
使用者がピンチになればなるほど念弾の威力は増幅する。

5話　海賊襲撃

念銃を手に入れて、キツネグマのトラブルから3年たち私は8歳になっていた。

今日、両親は仕事で隣町に出かけており私は1人で留守番していた。

銃の訓練は両親のどちらかが一緒じゃないとできないので
（きつーく、自分達がいないときにゴム弾やＢＢ弾のものでも銃に触れないように言われています。）

そのためこういう日は念の修行の方を中心にしています。

「よし、これで凝・隠・周・円・堅・硬・流とだいたいの応用技はある程度は習得だね」

念の修行は順調に進み、
円は今のところ２０から３０ｍまでできるようなり
最近、堅（練）も１時間以上維持できるようになって
結構、オーラの総量は上がっていた。

それなりに念の修行に慣れていつもどおりに過ごしていると・・・

ウーウーとサイレンが町中に響き渡った。

「ん、なんだろ？」
とのんきにしていると

「か、海賊が攻めてきたぞー！」

「なんですとー！！」

家の外に出ると町中大騒ぎだった。

「警察は何をしてるんだよ？」

「海賊の奇襲でこの街に在留していた警官全員殺されたよ」

「おいおい、襲撃してきた海賊は１００人以上いるんだぜ。
他の町から軍や警察の応援やハンターが派遣される頃には
この町は壊滅だぞ」

（うわー、メチャクチャやばい状況だなー。
このままだと間違いなく甚大な被害がでる。
時間的に応援は期待できない。
仕方ない・・・・
私１人で皆にばれないように海賊をつぶしますか・・・）

6話　チェリッシュVS海賊　前編

ガスッ
「グェッ」
ドコッ
「ハグッ」
ビュッ
「ギャッ」

「よしこれで１０人」
チェリッシュは港に向かっていた。
とりあえずばれないようにフードで顔を隠しながら、
ここまで絶で気配を消しつつ
次々と海賊を倒していった。

さっきまで騒がしかった港町は住民全員が避難してがらんとしており
今、この町にいるのはチェリッシュと海賊と逃げ遅れて捕まった人
質のみである。

「まずは人質の救出から
確か皆海賊船につれて行かれていたわね。」

港　海賊船
「お願い助けて・・・」
「ひいいい」

「うわあああ」

「へへ大漁大漁だぜ」

「こいつら奴隷として高く売れそうですねー。」

「ああ、マフィアにでも高く売りつける予定だ。」

そこには６０人ほどの海賊と牢に２０人ほどの女・子供が捕らえられていた。

「そういえば船長はどこだ?」

「船長室で酒飲んでいます。」

「まあいい、軍や警察やハンター共が来る前にとっとと引き上げようぜ
長居は無用だ」

「あのー」

「どうした」

「町に向かった連中全員との連絡が取れません。」

「!?　なにかあったな」

カラーン

「ん・・・」

海賊達は音がした方に目を向けると
そこには街に向かったはずの新入りが突っ立っていた。

「どうした新入り？」

「つ、つええ」

ドサッ

「「「！？」」」

いきなり男は倒れてそこにはフードで顔を隠した小柄な奴が現れた。

7話　チェリッシュVS海賊　後編

「このチビが、どうやってここまで来たか知らねえが
ずいぶんふざけたことをしてくれたな。」

「ふん、てめえがいくら強かろうが武装した俺ら６０人の敵じゃあねーよ
死にやぶげらっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「て、てめえー、野郎共やっちまえー」

３分後
そこには海賊６０人の死屍累々の山が出来上がっていた。
海賊達は銃を撃ちまくってチェリッシュを殺そうとしたが
あまりのスピードに翻弄されてその隙を突かれ彼女から
ゴム弾を喰らったり殴られたり蹴られてして全員あっという間に
何が起こったのかわからないままに意識を飛ばしたのだった。

「ふぅ、集団の対人戦闘の実践経験は初めてだから
少々不安だったけど楽勝だったわね。
父さんから護身術学んでおいて良かったわ。
さて人質の救出に向かいますか。」

ヒュウゥゥゥ

「あれは！？」

ドコオォォォン

「危ない危ない
まさかいきなりバズーカをぶっ放すなんて」

「てめえかぁー、俺様の部下を皆叩きのめしたのはぁ――――――」
そこには全身に鎧を着た男がいた

「このクラーク海賊団船長であるクラーク様を怒らせたことを後悔させてやるぜ――――」

（え、クラーク・・・）

そしてよく見るとその男の姿はＯＮＥ　ＰＩＥＣＥのドン・クリークに
ものすごく似ていた。

（プッ、なんかやられキャラにしか見えないわ）

「笑うんじゃねええぇぇ（怒）」

「はいはい、とりあえず寝ていて下さいね。」
そう言ってクラークを殴るが

ガキン

「へっ？」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ――――――ッ
どうだー、ウーツ鋼でできたこの鎧の凄さは――――――
てめえの攻撃は何ひとぉぉぉぉぉつ効かねえな――――――
さあ死にやがぶれあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「うるさいです（怒）」
とりあえず周をかけたゴム弾を喰らわせて秒殺しました。

こうしてたった1人の少女によって賊は全滅してこの日起きた海賊騒動は解決した。

7話　チェリッシュVS海賊　後編（後書き）

このクラークはまた登場させる予定です。

8話　天空闘技場1

海賊襲撃事件から半年たち、町は平和な日々に戻っていた。

海賊達はガキにやられたとわめいていたが皆は賊の戯言だと思い誰も信じなかった。

海賊を討伐したのは表向きは警察ということになっている。

私は海賊襲撃された頃は町のはずれの森で遊んでいたと両親にごまかしたからね。

ハンター試験を受けられる年齢まであと1年ちょっとになり私は両親に自分の将来を話していた。

「ハンターになるって、ハンターはどれだけ危険な職業かわかっているのか？」

「そうよ、私達は昔ハンター試験を受けたことがあるけど、とてもやばかったわよ。」

というふうに、メチャクチャ反対されていた。
しかも、今話した通り両親は１０年以上前にハンター試験を受けたことがあるらしく、ナビゲータを見つけて本試験にまではたどり着いたのだが、２人共その本試験で大けがを負い落ちたらしい。

（まあ、そんなひどい目にあったのだから当然か・・・）

それでも根気よく粘って説得を続けて、両親はようやく折れてくれた。

「はぁー、わかったわ、ただし条件があるわ。」

「条件って？」

「今から1人で天空闘技場に行って、
少なくとも１００階クラスを楽勝でクリアできるようになれば
ハンター試験を受けてもいい。」

（天空闘技場かー、修行と金稼ぎには丁度いいや。
まだ、それなりに時間があるしハンター試験に備えて頑張りますか。
）

9話　天空闘技場2

「うう・・・むさいマッチョばっかり・・・」
天空闘技場には巨漢・強面・筋肉と加えて
礼儀知らず・野蛮・下品な男達がずらりと並んでいた。

前も後ろもマッチョマッチョマッチョ。
しかも子供それも女がここにいることが非常に珍しいためか、
マッチョな男達は私に好奇な視線を向けてくるのでかなり精神ダメージがきた。

数時間後

「天空闘技場へようこそ。こちらに必要事項をお書き下さい」

何時間も並んでようやく到着した受付で、
殺伐とした闘技場とは似合わない受付嬢に1枚の書類を渡され
名前・生年月日に適当に闘技場経験の有無・格闘技歴・格闘スタイルを書いて
書類を渡し、闘技場内に入った。

闘技場内は16のリングがあるかなり広いドームのような空間で、
観客席からは主に野太い声での歓声が飛び交っていて
リングの上では鍛え上げられた筋肉の男たちが、
互角にあるいは一方的に戦りあっていた。

「１５４３番・２０１１番の方。Ｅのリングへどうぞ」

「あ、わたしだ。」

「両者リングへ」

（私に対する会場の野次は騒がしいなー）

「おいおい、嬢ちゃん。ここは遊び場じゃないんだぜ？
ここにいるってことは大けがしても文句は言えないぜー。」

対戦相手である身長が私の２倍はありそうな巨漢の男は
そう言ったが私は無視した。

「ここ１階のリングでは入場者のレベルを判断します。制限時間３
分以内に自らの力を発揮してください。それでは、始め！！」

「さあ、嬢ちゃんくたばぶごぉぉぉぉ」

右ストレートで観客席までブッ飛ばしておきました。

「・・・・・・・２０１１番、キミは５０階へどうぞ」

「どーも」

（さーて、頑張って修行と金稼ぎしますか。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3141z/

GUNHUNTERGIRL

2011年12月14日00時54分発行